

# 米欧回覧

第37号

発行

特定非営利活動法人

米欧回覧の会

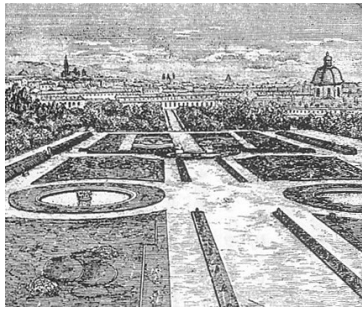
編集 総務部会

## 新年懇親例会は・・・ 華麗に、楽しく、ウイーン風に！

一八七三年、岩倉使節団が訪れたウイーンでは、ちょうど「万国博覧会」が開催されていた。そのウイーンを久米邦武は、『米欧回覧実記』で次のように描写している。

「此府の繁盛は仏国パリと相競い、一千年来の名都にて、その起源は甚だ久し」そして万国博覧会については「プラテール偕楽苑にて大田堂、長廊榭を建起こす」とあって、その陳列品については「衆邦の億兆、その精神を鍾めたる英華」とし「物として珍ならざるはなく、奇ならざるはなし」と評している。

二〇〇五年は、わが国でも



「プラテール」苑 (『実記』)

「地球と愛」をテーマに「万国博覧会」が開催されることであり、当会の新年懇親例会は、百三十年前の使節団の驚きと興奮を想起しながら、オーストリアをテーマにウイーン音楽、料理も用意し、その雰囲気を楽しもうという趣向である。

駐日オーストリア大使をはじめ日奥協会の会長である久米邦武氏も来会される予定であり、賑々しく、新年を寿ぎ、懇親を深めましょう、どうかふるってご参加ください。ご家族、お仲間も大歓迎です。

### 講師速成ビデオ研修会

#### 二月に開催！

十二月二日、幹事の有志を対象に「ビデオ研修会」なるものが開かれた。これはビデオを上映する際に必要とする知識やノウハウを勉強しようという企画で、泉三郎氏から詳しい解説や裏話を聞いた。

参加者は、同窓会などさまざまな集まりでビデオを上映する自信がついたようだ。

それは「ビデオ講師」速成研修会というべき内容であり、この際、講師志望の一般会員にも呼びかけて開催しようということになった。二月十九日(土)午後、国際文化会館、志望者はふるって参加してください。(詳細は五頁)

### 「冒険」合評会、盛況！

#### 三月に「続編」を開催予定

十二月九日に行われた「岩倉使節団という冒険」合評会は、二十三名の参加者を得て盛会だった。(詳細は四頁参照)しかし、参加者からいくつかの重要な問題点が出されたにもかかわらず、時間の関係で著者からの応答を聞くことができなかった。そこであらためて機会を設け、問題点に絞って著者の意見も聞き、ディスカッションをしようということになった。

日時は三月十日(木)十八時三十分、場所は国際文化会館。

### 長州歴史ツアー

二〇〇五年の歴史ツアーは長州をテーマに行うことになった。現在のところ、四月十四、十五、十六の二泊三日で、萩、下関、山口を訪れる予定である。目下担当の永富邦雄氏らの肝いりで、具体案が詰められている。現地での参加も可能であり、参加希望の方は、あらかじめご予約いただきたい。

「米欧回覧実記」の現代語訳の出版について、過日、慶応義塾大学出版会をお訪ねした。応接室でまず目を惹いたのは、そこに飾ってあった昨年出版されたばかりの堂々たる「福沢諭吉著作集」全十二巻であった。そして私は、来年四月ごろにはこの隣に、わが「米欧回覧実記」現代語訳の五巻本が並ぶことを想像し、福沢と久米は同時代を生きた、同じような旅をし著作を残しながら、生涯一度も会うことはなかったのではな

## 岩倉使節団資料館

泉 三郎

が、久米の著作はいろいろの面で地味でありまさに対照的であった。今回、水沢周氏の三年に及ぶ尽力により「米欧回覧実記」のわかりやすく流麗な「現代語訳」ができることで、我々は幕末維新期の日本人の二大西洋見聞録を併せて読むことが可能になる。しかし、久米実記の「雑ニシテ統ナキ」状況は変わらない。そこで、より読みやすく、わかりやすくするために、適切な索引や資料があることが望ましい。実は「福沢諭吉著作集」にも、付録として「福沢諭吉資料館」なるCD-ROMがついている。そこには、「年表」、「ことば」、「関連人物」、「旅」などが掲載されていて好都合である。

この二人は、最も早い時期に西洋文明をつぶさに見て歩き、貴重な見聞録を残した代表的日本人である。福沢は、「西洋事情」、「世界国尽」、「学問のすすめ」、「文明論之概略」などテーマ毎に口語体でわかりやすく書いたのに対し、久米は読み下し漢文調の日記体でエンサイクロペディア的に書いた。そのため福沢の著作は当時だけでも数十万というベストセラーになり、極めて大きな影響を及ぼした。

そこで、おのずから我々の仕事としての「岩倉使節団資料館」のアイデアが浮上してくる。当会でも、この際これまでの調査研究の成果と会員の知的パワーを結集して、そのようなものをつくるべきではないか。それはNPOとしての初仕事としても設立十年記念の事業としても格好のものではないか、会員有志の積極的な意見と協力をお願いしたい。

# 第35回 全体例会

## 保阪正康氏講演 「中国から見た昭和という時代」

十月三十日(土) 十三時から、プレスセンターホール(内幸町)で第三十五回の全体例会が開催され、雨のなか六十名が参加した。

一部の全体例会は浅沼氏の司会進行で行われ、まず泉代表が、二部の講師である保阪正康氏の紹介と合わせて、NPO法人となった最初の例会挨拶を行った。

続いて、部会報告が、実記を読む会(多田氏)、英文実記を読む会(小林氏)、歴史部会(永富氏)、現未来部会(小田氏)と続き、最後に新たに編成された総務部会の報告を山田氏が行った。

コーヒーブレイク後の二部は、歴史部会の半澤氏の進行によって保阪正康氏の講演が十六時三十分まで行われ、その後有志による保阪氏を交えた懇親会が新橋亭で行われた。

### ★泉代表挨拶要旨

この会は、このたび正式にNPO法人になった。これまで内輪の勉強会あるいはサロンのように楽しんできたが、今後は、これをベースにしながらいち社会に役に立つ

という視点あるいは社会的な発言や若い世代に我々が学んだことを伝える点をプラスしていきたい。

当会は『米欧回覧実記』を読むことから始まっているが、歴史部会は、ずっと日本近代の百五十年をなぞって勉強している。今年は、三回にわたった中村政則先生の通史セミナーを開催し、前回は、岡崎久彦氏から人物中心の外交史の話聞いた。そして現未来部会は、その都度現代の問題を考え、論じ合っている。

「歴史から学ばざる者は亡ぶ」というが、当会は、歴史を単に過去として学ぶのではなく、現代に生かすべく学ぼうという姿勢である。

本日の講師である保阪氏は、延べにして四千人、実質三千人以上にインタビューして、生きた昭和史を掘り起こした第一人者である。

インタビューした人のエッセンスを書いた著書「一語一会」(清流出版)のなかで、どうして学者の歴史や教科書は総じて面白くないのだろうと書いておられるが、それに

対して作家やノンフィクション作家の歴史ものが面白いのは、人間が描かれているからだと思う。人間は、もともと矛盾しているものだし、間違ってもある、それをそのまま認めて書いていくから面白いのではなからうか。私は歴史とは多面的で、矛盾があつて当たり前という感じをもっており、人間的なものであるべきだと思う。

保阪氏は、昭和史が一番詳しいけれども、本日は中国あるいは韓国からみた日本という視点からお話をしていた。しっかりと勉強していきたい。

我々の会には、実に多彩な素晴らしい人材がいらっしゃるのだが、個々にはあまり交流がない。実は保阪氏も会員の一人である。これからは会員相互の交流を盛んにして、それぞれ持っているものを発表しあい、意見交換によって高めあうことをしていきたい。事務局はむろん、各部会もその方向で、前向きに努力していただきたい。

### 講演要旨

#### ■私の昭和史研究と中国

私は昭和史の聞き書きを続けてきたが、近代日本の最大の誤りは大陸政策にあったと考えている。

初期の段階では過ちを犯さ

ない可能性もあった。日中協力して新アジアをつくらうとした日本人がいた。孫文の辛亥革命に参加、協力した日本人であり、滔天らの宮崎兄弟、山田良政、純三郎兄弟、頭山満らの玄洋社、犬養毅らである。しかし彼らはその志を全うすることができなかった。

#### ■国民党陳立夫の証言

私は、台湾で陳立夫らの国民党要人から一九三〇年代に国民党は何を考えていたかを取材した。当時、中国人を幸福にするという目的は共通だが国共両党の方法が異なっていた。国民党からは、共産党はコミンテルン依存で中国の現実に合わない政策をとり「二つの中国を争わせる」という策動に乗っている、と見えた。

一九三七年の廬溝橋事件の直前に、日本の国会議員団約三十人が、蒋介石政府との友好を求めて南京政府を訪ねた。国民党の責任者だった陳立夫は彼らに会って「私たちとあなたたちの共通の敵があるはずだ。それは共産主義じゃないか。それと白色帝国主義(イギリスのこと)じゃないか」と語った。

さらに陳立夫の秘書からこんな話も聞いた。一九九〇年代に鄧小平が陳立夫に対して「北京から台北へ特別機を飛ばすから北京へ来てくれ。よく話をして台湾問題を解決しよう」と申し出た。陳は次のような返事



を書いた。「私とあなたの間には何万人の死体が積み重なっている。その死体を超えてあなたとこのところへ行くには私はあまりに年を取りすぎた。あなたもそうだと思う。だからもうこの世では会わないことにしよう」。私はそれを聞いてある感動を覚えた。

#### ■共産党への関心・共産党からの関心

一九二一年に結党した中国共産党も孫文を父と見たから孫文を国共で取り合つたといえる。共産党の孫文観は生涯の前半はブルジョアジーの友、後半は革命家というものである。

国民党を取材する一方で共産党の側にも聞きたいことは多かつた。偶々私の『昭和陸軍の研究』(朝日新聞社・一九



阪正康氏

九九年)を読んだ中国社会科学  
院日本研究所の長老、劉大年が  
関心をもった。また、現在の日  
中交流での中心人物である政  
治家後藤田正晴を書いた私の  
『後藤田正晴』(文藝春秋新社、  
一九九三年)の中国語訳が新華  
社から出版された。そういう背  
景があり六、七年前に初めて訪  
中した。以来、中国の歴史研究  
者と交流を続け中国の日本近  
代史研究を知るようになった。  
国民党の要人の話を聞き、中  
国共産党の考えを知った立場  
で私は昭和という時代が中国  
人にどう理解されているかを  
話したい。

■「西安事件」の重要性  
近代中国をみる上で大切な  
のは、一九三六年十二月の「西  
安事件」を良く知ることであ  
る。日本でも号外が出たほどの  
大事件である。

国民党内は反共で一致して  
いたが抗日戦争の位置づけを

めぐって、蒋介石が滅共第一、  
抗日第二、軍閥張学良は逆に抗  
日第一・滅共第二という対立が  
あった。共産党は勿論、抗日一  
本の合作論である。張学良が蔣  
介石を南京から西安に呼び寄  
せて監禁し、「国内統一より先  
に、国共合作での抗日戦が何よ  
り大事じゃないか。これをのん  
でくれないとあなたを殺す」と  
いつて脅かした。蒋介石はこの  
要求を容れて国共合作がなっ  
た。対日抗戦の大きな枠組みが  
できたのである。

これより先、一九二四年の第  
一次国共合作は、一九二七年に  
多くの共産党員を殺害した蔣  
介石の上海反共クーデターに  
より破綻していた。日本は同  
年、在留邦人保護を理由に山東  
出兵(第一次)を行った。当時、  
国民党軍は将校は精鋭だった  
が兵士は弱く日本軍に対する  
勝算はなかった。そこで外交、  
とくに米国での親米派獲得に  
注力する。胡適、宋美齡、宋子  
文などその成功の事例に事欠  
かない。満州事変の原因を調査  
したリットン報告は内容は中  
国側からみて微温的だったが  
日本の国際連盟脱退は中国外  
交の勝利に帰結したといえる。

■軍事力VS政治力  
陳立夫は戦力では日本軍に  
敵わないと思つたと語つた。ソ  
連、米国から中国軍へ供給され  
た武器を使いこなせなかった。  
しかし陳によれば日本軍は「侵

略のノウハウ」をもつていな  
かった。台湾三軍の総責任者  
で、蒋介石の養子だった蔣緯国  
も日本軍を分析してこういつ  
た。「どんな軍隊でも侵略軍は  
病に取りつかれるというのが  
歴史の教訓だ。際限なく兵を進  
める。進めば進むほど最後はど  
うなるか。崖っぷちまで行って  
必ず墜落する」。

国民党軍は米国の軍事顧問  
団によって次第に強化された。  
共産軍はゲリラ作戦で農村の  
開放を進め都市労働者、民族資  
本を自己の陣営に引き入れた。  
日本の満州支配は実は大きな  
国民的な怒りを呼んだといえ  
るが、「西安事件」、「盧溝橋  
事件」以降は軍事力の強化とと  
もに民族意識も昂揚した。要す  
るに日本将軍の軍事力VS中  
国の政治力というのが日中戦  
争の構図である。

■実証的になった中国の日本  
研究  
台湾と中国本土における日  
本研究の動向に触れる。  
台湾の研究者の誤りは反共、  
容共の尺度しかなかったこと  
である。日本の反共勢力とのみ  
付き合ってきたことである。  
本土の研究者は柔軟になっ  
てきた。党の規制は緩和されて  
おり研究者年齢の若返りと実  
証的研究が始まったのが特長  
である。以前は党の見解、党の  
理論、党のプロパガンダの枠の  
なかで歴史が語られていた。し

かし私の見るところこの十年  
ぐらいの間で、事実の精査に  
よって日本軍国主義に取り組  
んでいる。原則からの批判では  
なく細かく調べた事実によつ  
て批判してくる。たとえば二〇  
〇三年十一月北京で開催の近  
代日本に関する日・中・韓(参  
加予定の北朝鮮は不参)三国の  
シンポジウムでの若い研究者  
の発言もそうであった。

■乗り越えるべき課題  
三年ほど前、中国で日中関係  
に関する広汎な世論調査が行  
われた。その結果をみると日本  
人に好感をもっていない中国  
人は濃淡の差はあれ七十%近  
くもいる。しかし日本を良く  
知っている中国人では好感を  
もつ人の比率が多くなる。私と  
話をする中国人は「保阪さんの  
前の世代が中国人にあんな残  
虐なことをやったとは信じら  
れない」という。いずれにせよ  
中国人が一九三〇年〜四〇年  
の日本にもつイメージを我々  
は乗り越えること、つまり事実  
を認識し克服することが必要  
である。そして乗り越えるには  
相応の覚悟が必要である。

我々の子供の世代はフリー  
ハンドで中国人と接するだろ  
う。私にはそれができないから  
自分の世代で解決できること  
は解決したいと思う。どこまで  
いけるかは分からないがこの  
気持で中国研究を続けたい。こ  
れが私の結論である。

質疑応答

- 保阪氏講演のあと質疑応答  
に入った。内容を簡記すれば  
およそ次の通りである。
- 非専門研究者が昭和史に関  
する資料作成や資料保存を続  
けているというがどのような  
ものがあるか。
- ▼ 中国語の資料翻訳など色々  
ある。
- ◎ 日本敗戦後に日本軍により  
蒋介石軍への教育や支援が行  
われた事実について。
- ▼ 岡村大將ら一部の軍人によ  
り人間教育や政治教育があつ  
たのは事実。国共内戦の文脈か  
らの理解が必要である。
- ◎ 盧溝橋事件の陰謀説につい  
て。
- ▼ 西安事件の重要性を強調し  
たのは国共合作が盧溝橋事件  
になんらかの形で帰結したと  
考えられるからである。どちら  
が先に発砲したといった議論  
はあまり意味がない。
- ◎ 小泉首相の靖国神社参拝に  
対する中国人の態度は階層で  
どうちがうか。
- ▼ 一般大衆はこの問題を詳し  
く知らない。研究者、ジャーナ  
リストらの公式参拝への否定的  
感情は強い。日中共同宣言の  
精神にもとるという原則論が  
根底にある。

(文責) 半澤 健市

合同書評会(総務部会主催)

# 岩倉使節団という冒険



十二月九日(木)、泉三郎著「岩倉使節団という冒険」(文春新書)の合同書評会が国際文化会館にて開催された。主催は総務部会であり、山田哲司氏の司会で進化した。参加者は二十三人。最初に、著者である泉代表が以下のような出版の経緯を述べた。

## ■泉氏の説明■

岩倉使節団に関しては、二十年前くらい前に「明治四年のアンバサドル」(日本経済新聞社)というノンフィクションスタイルの本を書き、続いて「新・米欧回覧の記」(ダイヤモンド社)、「米欧回覧・百二十年の旅」(図書出版社)、「堂々たる日本人」(祥伝社)と書いた。その後何とかな全体像に迫りたいと、書き溜めた千数百枚の下書きがあったが、今回は新書版ということで、三分の二をスライドを九十分に圧縮した時と同じような要約作業を行った。

留守政府との関係など人物の動きをなるべく盛り込むようにした。

また、プロローグとエピローグで、現代の諸問題、グローバルゼーションの問題との係わりについて触れている。

岩倉使節団を知らない人には、一つのガイドブックになるのではないか。皆さんで問題点について議論し、共通の課題として深めていく素材になればと願っている。

## ■評者のコメント■

続いて、水澤周氏、半澤健市氏、持田鋼一郎氏の三氏がそれぞれコメントをした。

### ◇水澤周氏コメント

この本は岩倉使節団とその半公式記録といえる『米欧回覧実記』のガイドブックとして作られている。派遣の発想と経過、結末がコンパクトにまとまり、バランスがいい。まとまっているだけに、読者が『実記』そのものを読んだような気になり、本体に取り組まないことになる懸念もあるくらいだ。

また、本書の第五章では、中東アジアの状況、帰国後の政治への反映や状況をよく述べている。その政治的な流れは当時の国内事情、国際事情が織り成

す政治力学の中で見る必要がある。明治六年の政変後に実権をとった政府に大きな影響を与えたという提言は大きな意味がある。そのあたりをたたく台として、今後の論議を深める必要がある。

### ◇半澤健市氏コメント

本書の特色は、司馬遼太郎流の国民に希望を与える「明るいナショナリズム」が基調。全体としては近代化自体への懸念・懐疑はあまりなく、近代化肯定論にたっている。

今までの数ある著作を経て、本書の記述に工夫・進歩がみられ、非常によくまとまっている。人間関係論による比較論でおすすめられているのが特色といえるが、もう少し、政治力学、経済からの接近が欲しい。

また、グローバルゼーションという普遍的な価値の主張と、「米国の国益」を追求している認識している「アメリカン・グローバルゼーション」の使い分けは曖昧である。

『実記』は基本的に見聞録であり、本書でも同様に条約交渉など具体的なことは書いていない。調査理事官、交渉の記録への言及がもう少しあると、別の視点からのリアリティを与えることになるのではないかと。

なお、当会としての本書の利用方法としては、会員の購読、常時携帯して一般へのPR、会合での展示・販売、メディア露

出など書評、紹介の努力などが考えられる。

### ◇持田鋼一郎氏コメント

アントニー・ビーバー、「スペイン内戦」の冒頭に「歴史という牧場の草は誰が干草にしてもよい」とある。泉氏も多くの会員と同じく歴史の専門家ではないが、実務経験や人生経験を基にした学者と違う視点が生まれ、それが特長になっている。岩倉使節団という山を専門家の手から解放した点を評価する。本書もそういう点から読み解くべきである。

泉氏の会社経営者としての実務経験が、日本の近代国家経営の関連において充分生かされた試みと感じる。

岩倉使節団は、近代日本国家のグランド・デザインを描くための準備の重要な一環であったという視点にたつて執筆したと考える。破壊と建設、国際派と国内派、東洋と西洋、日本人のアイデンティティなど多くのキーワードが読み取れる。バランスが大事という考え方は基本的なスタンスだと思う。歴史には必ず行過ぎと振り返りがあるのが宿命、絶対認識ではない歴史認識に共感するところが多い。

ベネディクト・クローチェの言葉「すべての歴史は現代史である」という立場で読み解く視点が最後の方に出ていて面白く、共感を覚える。

## ■参加者からのひと言■

三氏のコメントをベースにした、フリーディスカッションに移り、参加者全員が発言した。主な意見、感想を掲載する。

●実記のことがまとまって分りやすく書かれている。久米の文章、大久保の日記、書簡などをひき、明治の文章を味わいながら読める。最後の章が、日本についての明治の政治的な展開も含めて書かれている。期待としては旅とその後の展開についても少し書いて欲しかった。キーワードは洋才と和魂のバランスであり、現代のグローバルゼーションの中に必要になってきている。

●私は『実記』の学際的的研究をしている二十五才の大学院生である。この本は学際的で、人間関係を基調にして書かれている。ただし、他の研究者を含め、宗教問題に対するコメントが少なくないと思う。

●使節団は快挙だが、その後の明治政府の展開に問題があり、どうして漸進的に近代的システムを育てることができなかったのかというところに、近代史の逆説があるのではないかと。

アジアに対する同情的な見方もある一方で、日韓併合の方向に入っていく最終的に太平洋戦争にいった。どうすれば軌道修正ができたのだろうか、と考えざるを得ない。

●エピローグとプロローグをもっと発展させてほしい。テーマは無限にある。

●「太陽暦で祝う正月」(百二十頁)。制度改革で事務が煩雑になるとあり、現在と同じで面白い。

●最近会った中国の留学生に「岩倉使節団」と『実記』のことを話したら、びつくりしていた。日本人はみな『実記』を知っているのかと問われたが、必ずしもそうではないとこたえた。その意味でもこのような本が出たことに意義がある。小見出しが巧妙で面白く読みやすい。岩倉使節団についての上質のガイドブックだと思う。

●コンパクトで解りやすい。大久保の帰国後一人ではなにもできなかった。奇跡の大逆転がこの本のハイライト、あれがなかったのではないか。

●私は普通の主婦であり、久米の『実記』の全体を読みきる力がなかったが、この本はわかりやすく大感激した。国内に多数の読書会があるはずで、皆に読んでもらいたいと思った。どこもつつかかるところなくスラスラ読める。人間が描かれていて面白い。

●二十年間、読書会をやっているが、「実記を読む会」は難しいと思っていた。その点、この本から入ることで『実記』に挑戦すればいい。

●アメリカに駐在していた経験があり、岩倉使節団は戦後の異文化コミュニケーションとの共通点があるという印象である。

●良質のガイドブックである。その後の日本がねじれたのは宗教問題が大きい。日本は、もともと宗教に対しては寛大な国であったが、キリスト教体制に対して天皇制を強化し、必要以上に神道をたてた。

●私は、勝者の歴史ではなく、表にでてこない部分に関心がある。

●私は若い人を海外に送り込む仕事をしており、これまで絶対『実記』を与えてみたが絶対読まなかった。その点では、「堂々たる日本人」は結構読まれているが、本書はさらに良い。見たことも無い文化に対する驚き、感激、疑問もある、知的な衝撃の連続。若い人が海外に行く時にどうしても身につけておかなければならない教養の一つだと思う。

●新書にしたのが大成功。現代から見るとどういう意味があるかという視点でうまくまとめている。ビジュアルにものごとく捉え、それが生かされている。使節団そのものの本質がよく書かれている。『実記』だけでは分からないことも書いてあり感心した。

(文責) 中山進

### ビデオ映像活用にむけて 講師速成研修会を開催

ビデオ映像「岩倉使節の米欧回覧」(全三巻、約九十分)の内容について、「一通り理解はしているつもりだが、さらに深くその背景や史実を知りたい」と思っている人は多いと思う。

また、最近外部から映像上映および講師派遣の要請が増加しつつあり、会のPR、会員増加のため、積極的に対応したいが、その際、講師として必要な知識、ビデオ機器の使い方、また、想定されるQ&Aを勉強することも重要な課題である。

そこで、泉氏を講師に「映像研修会」なるものを、とりあえず幹事を対象に、十二月二日(木)午後、国際文化会館セミナールームで開催した。参加者は八名。

まず泉氏より、スライドの制作および上映が始まった当初からの経緯について説明があった。

一九九四年都立大学、都民講座十回シリーズ(年配者対象の生涯教育講座)用にスライドを作成したのが始まり(約八百枚)。

岩倉使節団の足跡を辿る旅は、一九七六年から始めたが、その折写したものを蒐集した

資料をもとに編集、各巻八十枚ものを十巻にまとめた。今回のビデオは、その全三百分におよぶスライドを九十分要約したスライドをさらにビデオ化したものである。

現在はデジタル化しているもので、画面も鮮明になっている。なお、スライドについては、英語版(米国編六十分、欧州編六十分)もあるので使用は可能である。

続いて、ナレーションのシナリオに沿いながらの解説があった。

主な問題点は以下のとおり。

#### 第1巻

- ・使節団派遣の背景
- ・当時の東南アジア動向
- ・フルベッキのブリーフ、スケッチ
- ・大隈発案説
- ・派遣の目的
- ・女子留学生派遣
- ・使節団のメンバー選定の経緯
- ・船内での国内派と国際派の対立
- ・航海日数
- ・シスコ滞在延長の経緯
- ・伊藤の日の丸演説
- ・ソルトレークシティー滞在十八日
- ・シカゴ駅
- ・ワシントン滞在
- ・なぜアメリカから回ったか
- ・使節団の英語力
- ・旅の手配、支払い

- ・当初の日程
- ・当時の通信、郵便事情
- ・総費用
- 第2巻
- ・英国の当時の農業
- ・当時の主要都市の人口

#### 第3巻

- ・ヨーロッパの鉄道網ドイツでのビスマルク演説に対する評価、受けとめ方
- ・ロシア、デンマーク訪問とこの間の大久保、木戸の帰国の事情

(この後のスウェーデン、再度ドイツ、アルプス越え、イタリア、オーストリー、ウイーン万博、スイスなど論点も多いが、省略。)

なお上映に際しては、『実記』や手紙など漢文部分の引用は、耳から聴いたがけではわからないので資料として渡してはどうか、写真について使用のことわりを入れては、などの意見も出された。

結論として、この研修会はとても有意義であり、一般会員へ向けても「映像研修会」を実施に移すべきだということになった。

なお、講師を勤めるには、泉氏の著書「堂々たる日本人」と「岩倉使節団という冒険」の二冊は必読であり、「研修会」に参加される場合は事前に目を通されることをお勧めする。

(文責) 山田哲司

### 実記を読む会報告

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com



この一年間、イギリス篇を担当者が現代語訳をしながら読み進めるスタイルにも皆慣れ、現代語訳とその解説を各自工夫して要領よく発表できたようになつたと思う。

久米は、日本と同じ島国であるイギリスが工業を背景として発展していることに注目し、相も変らず、熱心に各地の工場や製造所の技術を視察し、丹念に描写している。

#### 第七十八回(十月七日)

小野氏は、「フィット、ウォールズ」社の製鉄場で鋳物工場、大砲や砲弾製造の見学をする場面を読みながら逐語訳をし、日本と世界の大砲の小史を述べた。続いて阿部氏がマンチェスターの牢獄見学について説明。使節団は、各地で実によく牢獄を見学している。一行は「テンペレント」社(禁酒協会)の訪問を受けて、日本も禁酒を心掛けるよう忠告を受けた。川島氏はメイフィールドの綿布への捺染工場見学部分を、周到に準備された資料を用いて説明。久米が実記原稿で、自らイラストを画いて説明していることを紹介。小林氏は、紡棉工

場見学のところを、難解な専門用語の意味を補足しながら、丁寧に解説。久米は各地で紡績所を見学の都度、産業革命の進歩発展を賛美している。

#### 第七十九回(十一月四日)

前月急逝された永島千代子様のご冥福を祈る。その後、吉原氏が百七十八頁のインジャラバ・ゴム製造所のところ、次いで、星氏が警察裁判所の巻を音読し解説。久米が裁判の様子を記している場面では、当時まだ裁判が日本に馴染みがなかったためか、弁護士と陪審員を混同していることを指摘。最後に水澤氏が最も難解とされている「コルプレーション、ガルーリー」(百九十二頁〜百九十六頁)を現代語訳。氏は、会社の字義、語義、個人会社の始まり、日本で初めてできた会社の丸屋(丸善)の創立に至るまで、資料を用いて解りやすく解説。

#### 第八十回(十二月二日)

第一部は米欧の会の会員ではあるが「読む会」には初参加の桑名正行氏を講師に迎えた。(氏は現在明海大学経済学部教授、三井物産時代から砂糖業界の重鎮)桑名氏は『実記』第三十巻の「ウォーカス」社の白糖製造場に記されているシュガーファイナリーの描写を、自らの手書きによる解説図を用いて説明。続いて水澤氏が原文を音読。現代語訳と「砂糖について」と題するプリントが配ら

れ、砂糖について補足説明があった。

第二部は忘年会。まずこの会を支えてくれた四人の故人(細田秋彦氏、小田八郎氏、合田一夫氏、永島千代子様)を偲んで、黙祷を捧げた。泉氏による「乾杯!」の後、チューター役の水澤氏に一同感謝。歓談後は来年の方針、今年の方針、今後の反省等、意見を出し合った。この日で八十回を迎えたが、今後とも楽しく有意義な会であり続けるにはどうすればよいか、引き続き話し合っ方針を決めることにした。少しでも関心、興味のある方は、まず、「見学」にいらしてください。

(文) 磯野成子

### 英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



昨年一月に始まった会も二年。途中カットすることなく着々と読み進み、使節団一行はいよいよアメリカに別れを告げ、イギリスに渡ろうとしている。十月、十一月の例会では北部巡覧ノ記、華盛頓府後記を終え、費拉特費府ノ記に入った。

十月には永島氏が奥様を亡くされた悲しみのなかを発表の為

#### 永島千代子さんを悼む

去る十月十日、永島千代子さんが旅先の北京で急逝されました。通夜・告別式は、十月十五日、十六日の両日行われ、数多くの会員が参列しました。心から哀悼の意を表し、ご冥福を祈りたいと思います。

なお、四十九日の法要に際し、ご遺族より、供養として多額の寄付金をいただきましたので、謹んでご報告いたします。

#### 水澤周氏

さらさらと明るい女性であつた。ものおじすることなく、ひともエネルギーをふんだんに分かち与えるような女性であつた。「であつた」と過去形で書かなくてはならぬことが、まだ信じられず、口惜しい。

国際シンポジウムのレポート編集を手伝っていただいた。めんどろな仕事を、「はい、はい!」といとも気軽に引き受け、たちまち結果を出す。永島さんは、この作業を通じて、編集という仕事のなんたるかを、おおよそ把握されたように思う。

二度目の共同作業は、北海道旅行の記録まとめである。シンポジウムの編集作業の際の修練がそこには見事に現れており、すでにプロ編集者ほだしというところであつた。冊子が完成した時の電話の永島さんの明るい声は忘れられない。電話の中では、中国の旅に出ることも語られ、実に楽しそうであつた。それなのに、わずか一月あまり後

に、さらに遠く遠く旅立たれてしまふとは...。本当に悔しい。

#### 石川直義氏

明るく視野の広い女性だつた。永島さんとは二〇〇一年九月スコットランドの歴史の旅を思い出す。同伴した母上の『恋人』であるスコットランド民謡の老いた歌手御夫妻との何年ぶりのかのデザイナーを御一緒した。母上の夢を実現させるこの女性は何んと親孝行なのかと感心した。一年後母上を亡くし、さらに二年後、ご本人が天国に行くとは。本当にこの会を愛しておられた、合掌。

#### 磯野成子氏

あなたが初めて「実記を読む会」にいらした時のことを今でも鮮明に覚えています。よく透る声で「暇なオバサンですから、何にでも声をかけてください」と気さくにおっしゃいましたね。実際は多忙にも拘わらず、さりげなく新しいグループに打ち解けることのできる方でした。卓越した事務能力に皆がどれだけ助けられたことでしょう。また、北海道旅行の写真入りの見事な文集を完成なさいました。余りにも突然のお別れは寂しい限りですが、天国から私たちを見守ってください。



永島千代子さん(松前にて)

現未来部会報告

連絡 塚本弘

Tel 03-3211-2765 Fax 03-3213-1371



tn@ne.jp

十一月二十
六日(金)、国
際文化会館に
十九名が参加。
テーマは「科学
技術を巡る日
本の国際対
応」。スピー
カーは当部会
幹事の塚本弘
氏。

に出席し、一同感動。生前の千
代子さんへの感謝を籠めてご冥
福を祈る。
十一月には Kilvert's Diary]
を讀書会でお読みの戸谷夫妻が
参加。一八七一年に登場する
Five Japanese Pupils (東伏
見の宮と四人の随員)を調べ、岩
倉使節団との関係も調べた事か
ら、当会に興味を持った由。
Kilvertは、Oxfordで学んだ牧師
で一八七〇年代のウェールズ、イ
ングランド境界の町の人々の素朴
な生活を記録に残したと解説。
英訳実記の興味深い事の一つ
は、各章末に二十〜三十頁位ず
つある訳者の注記である。現地な
らではの調査、情報を提供してく
れる。また、人名、地名、史実等
のスペリング、英語表記が解り、
インターネットで検索すると、多
くの場合写真つきで解説されてい
る。受け持ちの人がそれぞれに
調べて下さるのが楽しい。
(文) 浅生庸子

例会に先立つ十一月十四
十六日、国立京都国際会館で科
学技術国際フォーラム(STS
フォーラム)が開催された。世
界五十カ国の政治家、科学者、
産業界からノーベル賞受賞者
数人を含む四百八十名が参加
し、小泉首相が開会式の基調演
説を行った。
この会議は科学技術版のダ
ボス会議を目指したもので、主
催は元経済企画庁長官の尾身
幸次氏を委員長とするSTS
フォーラム実行委員会であり、
ボランティアに近い性格のも
のである。会議の準備段階から
コンセプトの決定、出席者の選
定・招請・出席の確保等、日本
がイニシアチブをとり舞台回
しを行った初めての世界会議
であった。成功裏に幕を閉じ、
来年九月の第二回に向けて既
に準備に入ったということは、
科学技術立国日本の快挙とで
もいふべきことである。
実行委員会の主要メンバー
であるJETROの副理事長とし
て、企画の段階から会議の取り
回しに中心的役割を担われた
塚本弘氏から話を伺い、質疑応
答を行った。会議の資料は全て
英語、会議も全て英語で通訳は
一切なしで行われたという。ど
んな人たちが参加し、どんな内
容の会議を行ったのか、狙いは
何か、その結果のメッセージは
公表されたのか、どのようの評
価されたのか、コストは如何ほ

歴史部会の現況

連絡 半澤 健市

Tel&Fax 03-3717-5576

khanzawa@dh.catv.ne.jp



どでどのように調達したのか。
興味ある多くの質疑が寄せら
れ、盛況のうちに、またSTS
フォーラムに誇りを抱いて散
会となった。
(文) 小田 仁彦
十月十五日
東京国際文化
会館において
石川直義氏が、
「私の伊藤博
文論」をテーマ
に報告。
伊藤博文は
明治の国家造
りに、最も貢献
し、国益を考え
た理想的な政
治家という立
場からの講演であった。
伊藤は好奇心が強く、誰にも
話しかけ意見を聞く能力をも
ち、鋭い見通しと現状改善の才
をもちあわせた実務家で、穩健
な性格もあり、松蔭のいう「幹
旋家」のセンスを遺憾なく発揮
して、明治国家の「この国のか
たち」づくりに最大の貢献をし
た。
伊藤は木戸の義弟来原良蔵
の影響を深くうけ、松下村塾に
学び、桂小五郎に従って、尊皇
攘夷の運動に参加していくが、
塙次郎の暗殺、英国大使館焼き
討ち、英国密航等の行動は、知
行合一を教える陽明学から来

ているという。
岩倉使節団への参加は、その
見聞が伊藤を大きく成長させ
たが、それ以上に大久保利通と
肝胆相照らす仲になり、岩倉具
視の信頼をかちえたことがそ
の後の政治人生で大きな資産
となった。明治六年の政変では
絶妙な調停・計略振りを発揮
し、留守組から権力を奪取し
て、一気にその後の政治の流れ
を決めた。
岩倉使節団の一番具体的な
成果は、明治欽定憲法制定に結
実したと思われるが、議会開設
運動の高まりから、それを抑え
つつ憲法発布、第一回総選挙、
国会開設まで一貫して主導し
て来たのは伊藤であった。外交
面では、欧米には慎重、アジア
には高圧的な姿勢が、日清・日
露戦争に現れたが、随所に洞察
力の凄さをみせた。最後の安重
根による暗殺は、逆に日韓合併
を進めることにつながり、日本
と朝鮮半島の歴史にとって不
幸な出来事であった。
今回は、伊藤の光の部分か
中心であったが、陰の部分の
検証が今後の課題であろう
か。
この種の人物を中心にした
幕末維新論・使節団の評価は
新鮮な切り口である。今後大
久保利通論、岩倉具視論、
木戸孝允論などをどなたかに
期待したいものである。
(文) 小野博正

関西支部報告

連絡 山崎 岳磨

Tel&Fax 06-6853-3137

takechan@tcct.zaq.ne.jp



十月十四日、
十一名が参加し
て例会開催。N
HK「その時歴
史が動いた」の
「グッドバイ
ちよんまげ」(十
月六日放送)の
ビデオを視聴し
た。木戸が外遊
以前より熱心な
断髪主義者で対
照的に岩倉は伝統重視主義者
であったのは面白い。
山崎氏より「NPO法人米欧
亜回覧の会」の発足について報
告あり、ついで第三巻サンフラ
ンシスコの輪読に入っ。五層の
ガラントホテルの場所は現在
高層ビルになっている、ホテル
の生活はどんなに驚きだった
か話題となる。動物園等に関す
る東西の考えの違いに注目が
集まった。ブドー酒瓶をフラン
スより輸入する貿易の原理、点
字教育の発達等進歩があるが
教員給与は男女差別が米国で
もあったようだ。
難波氏が八月にポツダム宮
殿を訪れた体験が披露され
ポツダム宣言にまつわる状況
について解説があった。会が単
調にならぬよう努力が続く。メ
ンバーを増やして若い方にも
入ってもらおう対策を相談せね
ばならないと思う。
(文) 北村彰一

### 「米欧回覧の会」ご案内

**趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。  
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

**会員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

**例会** 年に4回くらい全体例会をもちます。

**部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来、メディア部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

**機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

**幹事** 会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

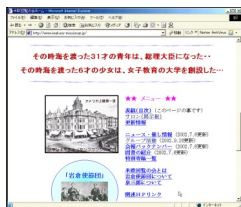
**会費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。

**事務局** 当面「イズミ・オフィス」に置きます。  
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16  
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL: 0426-46-3310  
FAX: 0426-45-8700

#### 入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 米欧回覧の会



#### .....ホームページのご案内.....

◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー など

\* 皆様のご意見をお聞かせ下さい

<http://www.iwakura-mission.jp>

### <催し案内>

2005年1月～3月の予定です

#### ☆第36回全体例会「新年懇親パーティ」

日時：1月12日(水)

開場 18:00 開宴 18:30

場所：シティクラブ オブ トーキョウ (1階)

港区赤坂 7-3-38 カナダ大使館ビル

電話 03-3401-1121

テーマ：「オーストリア」

会費：会員10,000円(同伴者も同様)

#### ☆実記を読む会

日時：1月13日(木)

2月3日(木)

3月3日(木)

場所：南青山クラウンインターチェンジ内サロン

電話 03-5469-2090

#### ☆英訳実記を読む会

日時：1月27日(木) 18:30～21:00

場所：国際文化会館 セミナー室

会費：1,000円(食事・飲物はでません)

世話人 岩崎洋三 [zaa96087@oak.zero.ad.jp](mailto:zaa96087@oak.zero.ad.jp)

#### ☆講師速成ビデオ研修会

日時：2月19日(土) 14:00～17:00

場所：国際文化会館 セミナー室

#### ☆「岩倉使節団という冒険」合評会(続き)

日時：3月10日(木) 18:30～21:00

場所：国際文化会館 セミナー室

\*2004年12月9日に開催された合評会(4P参照)

で出された疑問点、反論などに対する泉三郎氏のコメントを聞き、ディスカッションする会。

#### ☆長州歴史ツアー

日時：4月14日(木)、15日(金)、16日(土)

2泊3日

場所：萩、下関、山口の予定

#### ☆関西支部例会

日時：1月20日(木) 12:00～16:00

場所：関西文化サロン

(阪急グランドビル19階 電話06-6316-1577)

#### 編集後記

◇「北海道ツアー文集の申込みは永島千代子さんへ」の記事を印刷した前号が、事務局に届いた翌日に訃報に接しました。今でもメールをしていく時に永島さんの記録が目に入ることもあり、本心に信じがたい思いです。心からの追悼文(六頁)を三人の方からいただきましたが、紙面の関係で全文掲載できなかったことをお詫びします。

◇八十回を数える「実記を読む会」そして歴史部会と現未来部会の三本柱に加え、ビデオ研修会や「岩倉使節団という冒険」の合評会が総務部の尽力で実現し、軌道に乗せる段階となりました。これらは、映像や出版物などを媒介として外部に対する働きかけを行ない、NPO法人となった意義を全うすることを視野に入れた活動です。

◇岩倉使節団の研究をしている大学院生の会員から、不活発なホームページや入り込みにくい雰囲気などに対する素直な「苦言」が事務局に届き、幹事会でも議論されました。当会の重要課題の一つに、若い世代への働きかけがあります。世代間のギャップを埋めるために、このような意見をよい「刺激」と受けとめたいと思います。(N)